

平成 20 年 6 月 28 日  
現地説明会資料

## 八重垣神社遺跡（第 6 次）



**所在地** 鈴鹿市十宮町 1353 番地ほか  
**事業主体** 鈴鹿市教育委員会  
**調査目的** 開発（学校施設建設）に伴う埋蔵文化財の記録保存  
**調査期間** 平成 20 年 2 月 22 日～7 月（予定）  
**調査面積** 約 6,000 m<sup>2</sup>  
**調査主体** 鈴鹿市  
**調査機関** 鈴鹿市考古博物館  
TEL 0 5 9（3 7 4）1 9 9 4  
<http://www.edu.city.suzuka.mie.jp/museum/index.html>  
**調査協力** 株式会社イビソク

### 1 遺跡の立地

八重垣（やえがき）神社遺跡は、鈴鹿川が下流にさしかかる標高 11m ほどの低い土地に位置します。基盤となっている地層は、台地とは異なり、より新しい時代の河川によって堆積したものです。その河川の堆積からなる基盤層を掘り込んで弥生時代以降の生活のあとが残されています。

このような低地は、沖積低地（ちゅうせきていち）と呼ばれ、およそ 2 万数千年前以降に海水準の上昇に伴って堆積した軟弱な地盤です。現代よりも温暖であった約 6 千年前には海岸線が今よりも内陸にまで及んでいました（「縄文海進（じょうもんかいしん）」といいます）。その後、寒冷化に伴って海岸線が後退し、現代に近い地形が形成されたと考えられています。ただし、河川が人工的な堤防によって固定されることはなかったため、その景観は大きく異なるものでした。鈴鹿川はいくつかの支流にわかれ、伊勢湾に注いでいたと想像されます。古代において鈴鹿川下流域が「河曲（かはわ）」と呼ばれるようになるのはこのような地形環境によるものでしょう。

このようにして形成された沖積低地が開発されるのは縄文時代の終わり頃です。大陸方面から本格的な水田稲作農耕が伝わると、さらに低地の利用が進みます。八重垣神社遺跡で最も古い生活痕跡が認められる弥生時代前期は水田稲作農耕が定着していく段階にあたります。

現在水田として利用されることの多い沖積低地に対して、伊勢国分寺跡がある鈴鹿川左岸の台地や神戸から平田方面にかけての台地は、さらに古い時代の河川によって形成された段丘です。今から約 13 万年前から 7 万年前のやや温暖な時期（最終間氷期）の段丘を中位段丘、続く寒冷な時期（最終氷期）の段丘を低位段丘と呼びます。年代を決定する火山灰層にめぐまれないため、正確な対比は難しいのですが、鈴鹿川左岸の高台は中位段丘、右岸の低い台地は低位段丘と考えられています。

このように低地と台地とではその形成時期が何万年も違うため、それぞれに残された遺構のあり方はずいぶん異なることとなります。

### 2 八重垣神社周辺における弥生時代の遺跡

沖積低地およびその周辺の低位段丘で見つかった弥生時代の遺跡には、上箕田遺跡、大木ノ輪（おぎのわ）遺跡、須賀遺跡、神戸中学校遺跡、沢遺跡などがあります。上箕田遺跡は縄文時代晩期から弥生時代にかけての遺跡で、津市の納所（のうそ）遺跡や多気郡明和町の金剛坂（こんごうざか）遺跡などとともに伊勢湾西岸地方を代表する弥生遺跡です。弥生時代前期に西日本一帯に広がった共通の特徴を持つ土器を遠賀川（おんががわ）系土器と呼び、本格的な稲作農耕の担い手が残したものと考えられています。北勢地方でその遠賀川系土器が初めて現れるのが上箕田遺跡や大木ノ輪遺跡です。

一方、鈴鹿川左岸における中位段丘上の遺跡では一反通遺跡があり、弥生時代前期の新しい段階以降後期に至るまで存続する大規模な集落跡です。同じく鈴鹿川左岸の木田坂上

遺跡や加佐登遺跡では縄文時代晩期の流れをくむ土器棺墓が見つかっており、時期的には八重垣神社遺跡の弥生前期土器群に近い時期のものと考えられます。

弥生時代中期以降は境谷遺跡をはじめ、多くの遺跡が鈴鹿川左岸の段丘上に形成され、後世の開発によって失われていない限り、いたるところに遺跡が残っています。

### 3 遺構と遺物

**弥生時代前期** 2千数百年前

溝 SD050・052・066 などが見つかりました。溝の中から壺・甕・蓋などの土器類が大量に出土し、石器類もわずかに出土しています。溝ごとに多少の時期差が認められるものの、おおむね弥生時代前期のうち、新しい段階のものです。

土器はヘラ描き沈線文で飾られた遠賀川系の土器が大半です。多くは西日本の広い範囲で認められる「広域型」のものですが、「壺式」あるいは「壺流」と呼ばれる「在地型」のものもある程度含まれます。これら遠賀川系の土器に加え、三河地方に分布の中心がある条痕文（じょうこんもん）系土器などもわずかに含まれます。

なかでも珍しいのはほぼ完全な形に復元できた沈線文（ちんせんもん）系土器（表紙写真）です。高さ 16 cm足らずの小型の壺で、溝 SD052 から出土しました。縄文時代の伝統を色濃く残す装飾の多い壺形土器です。東海地方の弥生前期から中期にかけての遺跡では一回の調査で数個体しか出土しません。完全な形に復元できるものは極めて稀で、煮炊きの痕跡が明瞭に残るものが多いようです。三重県内では四日市市の永井遺跡で同種の土器が出土していますが、器形や文様が異なります。

この沈線文系土器は文様や形態的な特徴から北陸地方に分布する柴山出村（しばやまでむら）式と呼ばれる土器で、製品として当遺跡に持ち込まれたようです。愛知県や岐阜県にも認められることから、相互の交流関係が確立されていたことが推定できます。

石器類には小型の片刃石斧（かたばせきふ）、太形蛤刃（ふとがたはまぐりば）石斧、環状石斧、石包丁（いしぼうちょう）などがあります。

溝の中から大量の遺物が出土したことから付近には居住域があったものと推定されます。溝が人為的に掘られたものか、自然の流路を利用したものかはっきりしませんが、集落のまわりを取り囲んでいた可能性もあります。

**弥生時代中期～後期** BC 1～AD 2世紀頃

方形周溝墓 SX078・080・087・105・106・107, 土器棺墓 SX085・095・103, 溝 SD001・002・007・018・049・082, 流路 SR069 などが見つかりました。付近に竪穴住居などからなる居住域があったと思われませんが、今回の調査では見つかっていません。土器棺墓や方形周溝墓はまとまって見つかっており、墓域が形成されていたものと考えられます。

溝 SD082 は古墳時代前期の遺物も含まれており、遺構が完全に埋まるまでにはある程度時間がかかったようです。

流路 SR069 は自然流路で、その北岸付近で土器類や木製品が出土し、古墳時代前期の土器も少し含みます。弥生後期から古墳時代前期にかけて埋没しつつ、次第に流れを南に変え、最終的には近世以降の流路に引き継がれていきます。

**古墳時代前期** 3世紀頃

竪穴住居 SH026・039・041, 溝 SD013・014 などが見つかっています。SH026 は一辺 5～6 mの方形の住居で、中央に炉があります。住居がまとまって見つかったあたりが古墳時代前期の居住域と見られますが、遺物自体は広範囲にわたって認められるため、遺構として残っていない部分にも居住域が広がっていたことが想定できます。

**古墳時代後期** 5世紀末～6世紀前半

溝 SD067・073・074 などが見つかっています。土師器や須恵器が出土し、その多くは破損品ですが、中には完全なものもあります。

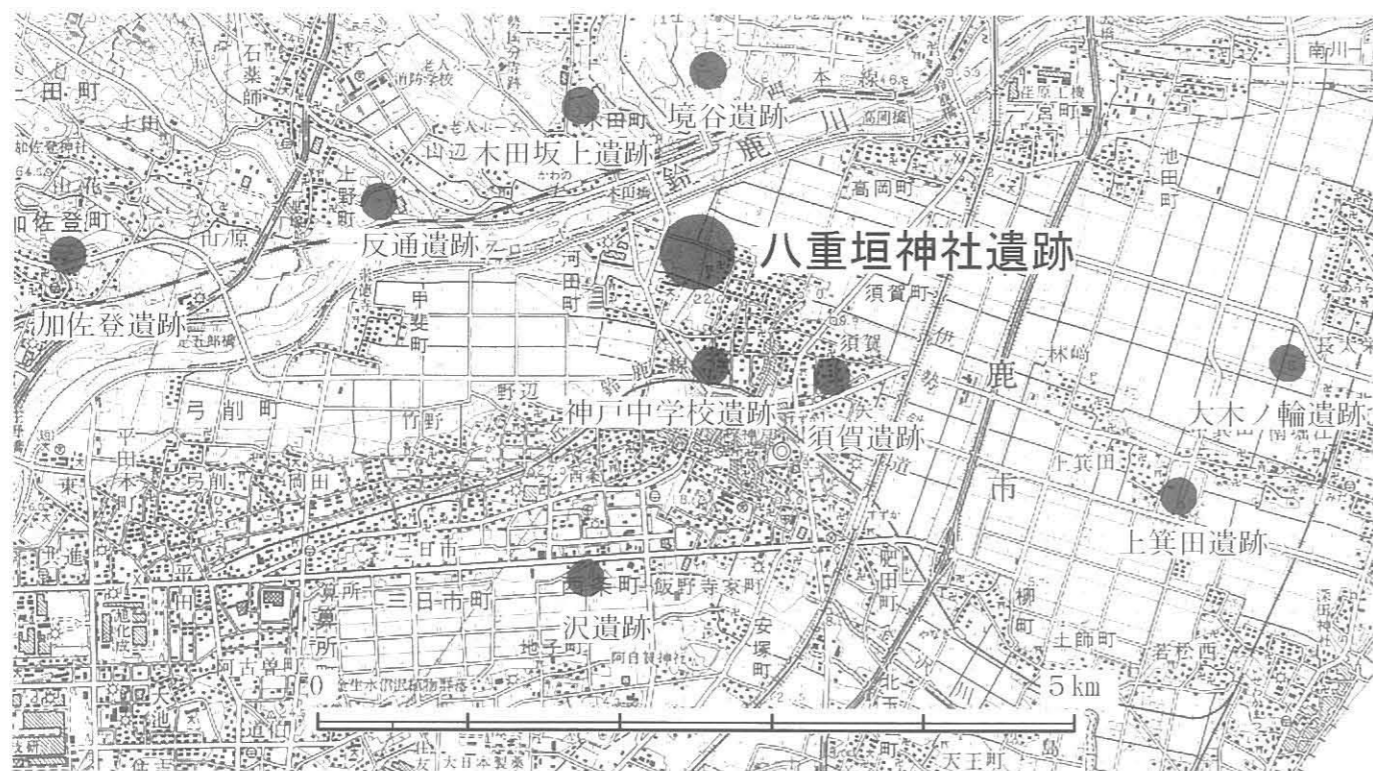
### その他

その他、古代・中世や近世以降の溝もいくつか見つかっています。なかには条里の方向に一致すると思われるものもあります。

### 4 まとめ

今回の調査は開発に先立ち、文化財の保存に支障が生じる部分についてのみ実施した緊急調査です。遺跡の大部分が中学校のグラウンドや校庭として保存され、今後も埋蔵文化財の包蔵地として良好な環境が保たれていくことは幸いでした。以上で紹介できたのは調査成果のほんの一部であり、これから資料整理をすすめていく過程でさらに多くの成果が得られることでしょう。


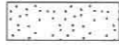



現時点で最も大きな成果は、弥生時代に関する豊富な資料が得られたことです。弥生時代前期の溝と豊富な土器類の発見は、伊勢湾西岸における弥生文化の始まりや展開を考える上で大変貴重な資料となりました。なかでも完全な形に復元できた沈線文系土器の発見は北陸地方との交流を示す好資料といえます。その他、弥生時代中・後期の墓域や古墳時代前期の居住域の一部が見つかったことも大きな成果でした。今回の調査を通して、水田稲作との係わりから軟弱で不安定な低地に居を求めた弥生時代前期以降の人々の暮らしを垣間見ることができたといえます。

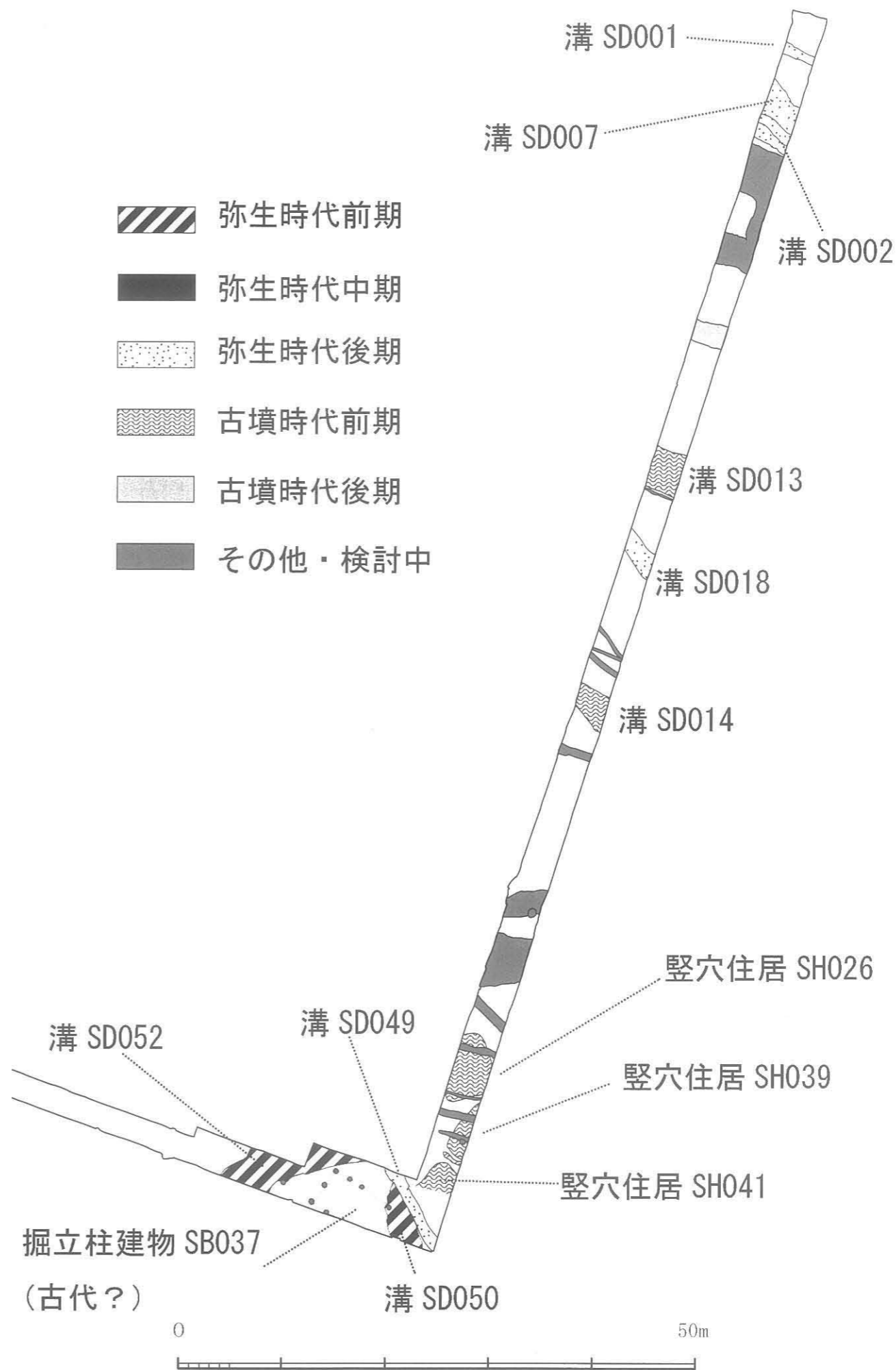


第1図 位置図 縮尺 1 : 50,000



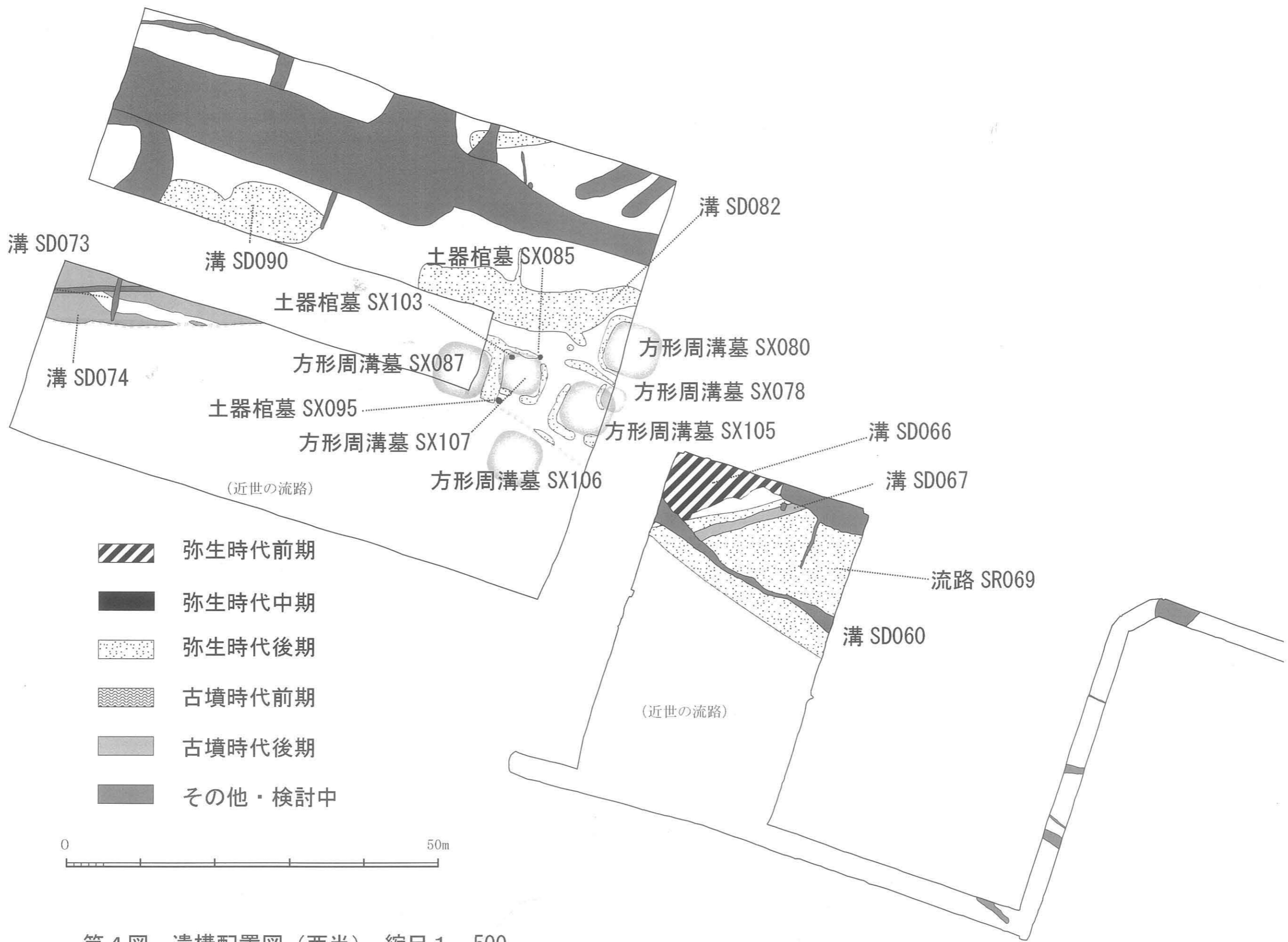
第2図 位置図 縮尺 1 : 2,500

-  弥生時代前期
-  弥生時代中期
-  弥生時代後期
-  古墳時代前期
-  古墳時代後期
-  その他・検討中



第3図 遺構配置図(東半) 縮尺 1 : 500

掘立柱建物 SB037  
(古代?)



第4図 遺構配置図(西半) 縮尺1:500